

「日本の昆虫の衰亡と保護」

"Decline and conservation of Japanese insects" supervised by Minoru Ishii

石井 実（監修），北隆館，325pp，定価3,500円（本体3,333円＋税）（2010）

日本の昆虫相が生息地環境の破壊，地球の温暖化，外来生物の侵入など多様な要因によって大きく影響を受けていることは確かであろう。昆虫の衰亡と保護の現状を26名の分担者が地域ごと，種類ごとに総括し，さらに，その保全への提言をまとめたものである。Ⅰ章 日本の昆虫の現状と保全，Ⅱ章 各種群の生息環境の保全に向けて，Ⅲ章 温暖化や化学物質，外来生物などの影響と対策，Ⅳ章 参考資料からなる。

まず，Ⅰ章において日本の昆虫の衰退を環境省レッドリスト（第3次リスト）からみる。掲載種は絶滅3種，絶滅危惧Ⅰ類110種，絶滅危惧Ⅱ類129種，準絶滅危惧200種，情報不足122種，地域個体群2種の合計566種に膨れ上がり，1991年のRDB発行後，わずか16年で2.7倍にも達しているとし，チョウ，トンボ，水生昆虫については，さらにその衰退の現状をくわしく述べる。もちろん，衰退の要因は地域により，また種類ごとで大きく異なるのだが，全国的にみて，河川・海浜種と里山種の減少・衰退が著しいと分析する。

Ⅱ章において，三草山のゼフィルス，赤城山のヒメギフチョウ，磐田市桶ヶ谷沼のベッコウトンボなどについては具体的な地域での保全活動と直面する問題点，ゲンゴロウ，糞虫，海浜性有剣ハチ類などについては全国的視野で生息環境悪化の現状を紹介し保全策を提言する。対象地域ごとで原因が異なり，対策も地域でそれぞれちがったものになることなど，保全に取り組む具体例ではその苦労が理解できる。

Ⅲ章においては種群でなく，温暖化，化学物質，外来種，シカによる植生の変貌などを述べている。

温暖化や外来種についてはホットな話題だけに最近ではいくつもの類書が出版されているが，本書でも温暖化で分布を拡大するものと絶滅のリスクが大きくなっているものがあることが，チョウ，セミ，ハバチなどで述べられ，外来生物による影響についても，セイヨウオオマルハナバチが輸入されていることはよく知られたものだが，農産物の輸入自由化によって42種もの病害虫が検疫対象から外され，ナミハダニなどは地域的な系統群があったものが，自由化によって大きく混乱し，これは防除上からも重要な意味をもつといった事実が紹介される。

他書であまり扱われていないのが，化学物質の影響であろう。散布される多様な農薬の生態系への影響について，「農薬は昆虫の多様性に悪影響を及ぼしているのか」といった解説がある。それぞれの項目ごとに関連するたくさんの参考文献がつけられており，より詳しく知りたい方には便利である。

Ⅳ章 参考資料には付表1 環境省2007年版レッドリストの掲載昆虫種，付表2 環境省の2007年版レッドリストにおいてランク外に降格した2000年版リストの掲載昆虫種，付表3「種の保存法」に基づく国内希少野生動植物種に指定されている昆虫類，付表4「外来生物法」に基づく特定外来生物，未判定外来生物，付表5「外来生物法」の枠内で社会にアピールする「要注意外来生物」，また付表6には，内容を異にするものの，わが国の海浜で得られた有剣ハチ類のリストが掲載されている。昆虫だけをとりだしたものとして，参考になる資料であろう。

昆虫類の衰亡と保護を多様な視点から解説されたもので、日本の昆虫の現状、その保護がいかな

る状況下にあるのかが理解できよう。

(渡辺弘之・京都大学名誉教授)